

大麦焼酎粕の施用がアルストロメリアの収量や品質に及ぼす影響

○伊東久徳・佐保 学
(大分農林水産研指花き)

【目的】

県内に豊富に存在するバイオマス資源である大麦焼酎粕を利用することで、地域資源循環を図ることができる。そこで、大麦焼酎粕がアルストロメリアに及ぼす影響を調査し、施用技術を確立する。

【材料および方法】

場内ガラス温室において、品種は‘ホイットニー’と‘レベッカ’を用いた。大麦焼酎粕は常圧蒸留大麦焼酎粕(水分88%, N:0.5%)を供試し、施肥量は窒素量50kg/10aとした。試験区の構成は、被覆複合肥料(13-9-11)360日タイプと大麦焼酎粕を混用施用し、①50%混合区(焼酎粕:被覆複合肥料=1:1), ②75%混合区(焼酎粕:被覆複合肥料=3:1), ③焼酎粕全量区(焼酎粕単独施用)とした。大麦焼酎粕は2015年5月19日に定植床へ施用し、地温向上を目的として透明ビニルで被覆した。15日後の6月4日に被覆を除去し、被覆複合肥料を施用した。

栽植様式は、株間40cmの1条植えとし、2015年6月9日に定植した。地中冷却期間は2015年6月9日から

10月11日までとし、1ベッドあたり2本の地中冷却パイプを地表から5cmの深さに株を挟むように20cm間隔で埋設し、10℃に冷却した水を終日循環させる方法で行った。冬期最低夜温は10℃設定で管理した。調査は2015年9月1日から2016年4月30日までの1区4株反復なしとした。

【結果および考察】

年内採花本数については、両品種とも50%混合区が最も多く、次いで75%混合区、全量区となった(表1)。年間採花本数については、‘ホイットニー’では年内採花本数と同様の傾向であった。一方、‘レベッカ’では全量区が最も多く、50%混合区が75%混合区と同等となった。また、切り花品質については全試験区において問題は見られなかった(表2)。

以上の結果から、大麦焼酎粕単独では年内採花本数の減少が見られたため、肥料としての利用は難しいと思われる。しかし、被覆複合肥料と混用施用することで肥料としての利用が可能であると考えられる。

表1 各品種における月別採花本数

品種名	試験区									(本/株)	
		9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	年内採花本数 ^z	年間採花本数 ^y
ホイットニー	50%混合区	2.8	10.0	15.0	12.0	6.3	3.8	13.0	33.8	39.8	96.5
	75%混合区	1.0	9.0	13.8	14.0	7.3	4.8	11.3	32.3	37.8	93.3
	全量区	0.8	5.3	11.0	10.0	7.8	5.5	11.3	37.3	27.0	88.8
レベッカ	50%混合区	0.0	0.3	8.0	5.8	5.5	6.5	12.5	32.5	14.0	71.0
	75%混合区	0.0	0.5	3.5	5.8	5.0	4.0	16.0	36.0	9.8	70.8
	全量区	0.0	0.0	1.5	7.3	5.3	2.3	17.0	47.5	8.8	80.8

z: 採花期間: 2015年9月~2015年12月

y: 採花期間: 2015年9月~2016年4月

表2 各品種の切花品質

品種名	試験区	草丈 (cm)	調整重 ^z (g)	茎径 (mm)	花梗数 (本)	花梗長 (cm)	曲がり ^y	下垂度 (度)
ホイットニー	50%混合区	157.3	42.4	6.5	4.6	8.8	0.3	2.8
	75%混合区	158.1	41.4	6.4	4.5	8.6	0.3	3.1
	全量区	156.3	41.4	6.5	4.5	8.7	0.4	2.7
レベッカ	50%混合区	158.4	41.1	6.2	4.7	12.0	0.5	2.7
	75%混合区	155.6	42.4	6.4	4.7	12.3	0.4	2.4
	全量区	154.0	42.3	6.4	4.7	12.0	0.5	2.4

z: 70cmに調整した重量

y: 基部から花首までの茎を固定し、茎長間の曲がり幅を0(0~1cm未満), 1(1cm以上~2cm未満), 2(2cm以上~3cm未満), 3(3cm以上~4cm未満), 4(4cm以上)の5段階で評価した平均値